

ヨシュア記24：1-33「ヨシュアの最後の言葉をとおして神が語られる」

ヨシュア記24：1-33

24:1 ヨシュアはイスラエルの全部族をシェケムに集め、イスラエルの長老たち、そのかしらたち、さばきつかさたち、つかさたちを呼び寄せた。彼らが神の前に立ったとき、24:2 ヨシュアはすべての民に言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムの父で、ナホルの父でもあるテラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。24:3 わたしは、あなたがたの先祖アブラハムを、ユーフラテス川の向こうから連れて来て、カナンの全土を歩かせ、彼の子孫を増し、彼にイサクを与えた。24:4 ついで、わたしは、イサクにヤコブとエサウを与え、エサウにはセイルの山地を与えて、それを所有させた。ヤコブと彼の子らはエジプトに下った。24:5 それからわたしは、モーセとアロンを遣わし、エジプトに災害を下した。わたしがその真ん中で行ったとおりでである。その後、あなたがたを連れ出した。24:6 わたしが、あなたがたの先祖たちをエジプトから連れ出し、あなたがたが海に来たとき、エジプト人は、戦車と騎兵とをもってあなたがたの先祖たちのあとを追い、葦の海まで来た。24:7 あなたがたが【主】に叫び求めたので、【主】はあなたがたとエジプト人との間に暗やみを置き、海に彼らを襲いかからせ、彼らをおおわれた。あなたがたは、わたしがエジプトで行ったことをその目で見てから、長い間、荒野に住んだ。24:8 それからわたしはヨルダン川の向こう側に住んでいたエモリ人の地に、あなたがたを導き入れた。彼らはあなたがたと戦ったが、わたしは彼らをあなたがたの手に渡したので、あなたがたはその地を占領した。わたしが、あなたがたの前から彼らを根絶やしにしたからである。24:9 それから、モアブの王ツィポルの子バラクが立って、イスラエルと戦い、ベオルの子バラムに人をやって彼を呼び寄せ、あなたがたをのろわせようとした。24:10 わたしはバラムに聞こうとしなかった。彼は、かえって、あなたがたを祝福し、わたしはあなたがたを彼の手から救い出した。24:11 あなたがたはヨルダン川を渡ってエリコに来た。エリコの者たちや、エモリ人、ペリジ人、カナン人、ヘテ人、ギルガシ人、ヒビ人、エブス人があなたがたと戦ったが、わたしは彼らを、あなたがたの手に渡した。24:12 わたしは、あなたがたの前にくまばちを送ったので、くまばちがエモリ人のふたりの王をあなたがたの前から追い払った。あなたがたの剣にもよらず、またあなたがたの弓にもよらなかった。24:13 わたしは、あなたがたが得るのに労しなかった地と、あなたがたが建てなかった町々を、あなたがたに与えたので、あなたがたはそこに住み、自分で植えなかったぶどう畑とオリーブ畑で食べている。』24:14 今、あなたがたは【主】を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、【主】に仕えなさい。24:15 もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える。」24:16 すると、民は答えて言った。「私たちが【主】を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にそんなことはありません。24:17 私たちの神、【主】は、私たちと私たちの先祖たちを、エジプトの地、奴隷の家から導き上られた方、私たちの目の前で、あの数々の大きなしるしを行い、私たちの行くすべての道で、私たちの通ったすべての民の中で、私たちを守られた方だからです。24:18 【主】はまた、すべての民、この地に住んでいたエモリ人をも、私たちの前から追い払われました。私たちもまた、【主】に仕えます。主が私たちの神だからです。」24:19 すると、ヨシュアは民に言った。「あなたがたは【主】に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神である。あなたがたのそむきも、罪も赦さないからである。24:20 もしあなたがたが【主】を捨てて、外国の神々に仕えるなら、あなたがたをしあわせにして後も、主はもう一度あなたがたにわざわいを下し、あなたがたを滅ぼし尽くす。」24:21 それで民はヨシュアに言った。「いいえ。私たちは【主】に仕えます。」24:22 それでヨシュアは民に言った。「あなたがたは、【主】を選んで、主に仕えるという、自分自身の証人である。」すると彼らは、「私たちは証人です」と言った。24:23 「今、あなたがたの中にある外国の神々を除き去り、イスラエルの神、【主】に心を傾けな

さい。」 24:24 民はヨシュアに言った。「私たちは私たちの神、【主】に仕え、主の御声に聞き従います。」 24:25 それでヨシュアは、その日、民と契約を結び、シェケムで、おきてと定めを定めた。 24:26 ヨシュアは、これらのことばを神の律法の書にしるし、大きな石を取って、【主】の聖所にある櫨の木の下に、それを立てた。 24:27 そして、ヨシュアはすべての民に言った。「見よ。この石は、私たちに証拠となる。この石は、【主】が私たちに語られたすべてのことばを聞いたからである。あなたがたが自分の神を否むことがないように、この石は、あなたがたに証拠となる。」 24:28 こうしてヨシュアは、民をそれぞれ自分の相続地に送り出した。 24:29 これらのことの後、【主】のしもべ、ヌンの子ヨシュアは百十歳で死んだ。 24:30 人々は彼を、エフライムの山地、ガアシュ山の北にある彼の相続の地境ティムナテ・セラフに葬った。 24:31 イスラエルは、ヨシュアの生きている間、また、ヨシュアのあとまで生き残って、【主】がイスラエルに行われたすべてのわざを知っていた長老たちの生きている間、【主】に仕えていた。 24:32 イスラエル人がエジプトから携え上ったヨセフの骨は、シェケムの地に、すなわちヤコブが百ヶシタでシェケムの父ハモルの子らから買い取った野の一画に、葬った。そのとき、そこはヨセフ族の相続地となっていた。 24:33 アロンの子エルアザルは死んだ。人々は彼を、彼の子ピネハスに与えられていたエフライムの山地にあるギブアに葬った。

導入

いよいよヨシュア記の最終章の学びとなりました。これまでの学びでわかったことは、ヨシュア記の主なメッセージは「神のご真実」でした。そこには、神がご自身の約束を守られる様子が描かれています。

ヨシュア記は同時に、神の聖さについても語ります。

神は約束の地にはびこる罪を裁くことを望まれました。そして、聖なる神に仕える聖なる民を置き、他国民の模範にしようとなさいました。

ヨシュア記には、神の偉大な救いも記されています。勝利、安住、そして安息という救いです。

ヨシュア記には、霊的な教えがたくさんあります。この書は、エペソ人への手紙と一対と見なされます。ヨシュア記は、イエス・キリストにある霊的相続の象徴です。

ヨシュアは、「シェケム」という歴史的に重要な場所で最期の言葉を語りました。

アブラハムの子孫がこの土地を受け継ぐと神が語られた場所が、この「シェケム」です。

(創世記12：6-7)

また、ヤコブが祭壇を築いた場所でもあります。(創世記33：20)

「シェケム」は、エバル山とゲリジム山の間に位置し、イスラエルの民が改めて自らを主にささげた場所です。(ヨシュア8：30-35)

ですから、イスラエルの民にとって、シェケムは特別な場所でした。

ヨシュア記最後の24章に、キーワードがふたつあります。ひとつめは、「主」です。この言葉がここに少なくとも17回登場します。次に「仕える」です。この単語は少なくとも12回登場します。

聖書を読むとき、ある特定の単語が繰り返し使われていたら、その単語に注目してください。それは、著者が何か大切なことを伝えようとしているからです。

当時のイスラエルの民に神が語られたメッセージを知り、私たちの日常生活に応用したいと思いますので、24章を3つに分けて学んでいきましょう。

まず、2-13節はこれまでのイスラエルの神との契約を振り返ります。次に、14-24節で、ヨシュアが民に契約を守るように命じます。そして最後の25-28節に、契約の証があります。

1. これまでの神と民との契約を振り返る。(2-13節)

a) イスラエルの歴史の始まりに、神の恵みがあった。(2-3節)

イスラエルの歴史においてまず注目すべきことは、神の「恵みに満ちた選択」です。

2節には、アブラハムとその父はユーフラテス川の向こう岸で他の神々に仕えていたとあります。神はアブラハムをイスラエル人の父祖として選ばれましたが、アブラハムがすばらしい人だったわけではありませんでした。

アブラハムは他の神々に仕えていました。約束の地に住んでいた人々と同罪だったのです。神はこれらの人々をヨシュア率いる軍を用いて滅ぼされました。

アブラハムとカナンの地の人々との違いは、アブラハムに神の恵みが差し伸べられたこと、そしてアブラハムが喜んで従い、神の恵みを受け取ったことです。

ヨシュアは、神の選びの民であるイスラエル民族が存在するのは、アブラハムのおかげではなく神の恵みのおかげだと民に念を押します。

適用

メッセージの初めに、大切な応用ポイントをお伝えしたいと思います。

それは、私たちの信仰の歴史を忘れてはいけない、ということです。

私たちにも、他の神々を拝んだときがありました。目に見える偶像や他の宗教でないにしても、心の中に何らかの偶像を持っていたのは確かです。

私たちの霊的な人生を振り返るなら、聖書の神に心から従っていなかった時代が必ずあります。

人生の歩みをすべて導いていただくために神のみこころをみことばに求める、ということをしないう時代がありました。

自分の思いどおり好き勝手に生きたときがあったのです。

けれども、今はクリスチャンなら、過去のいつかの時点で、神の恵みによって、私たちの心に恵みの福音が届きました。

アブラハムがそうであったように、これもまた神の恵みの御業です。

神の恵みとは、私たちが受けるに値しない神のあわれみが、イエスの愛とともに私たちの心に差し伸べられることです。

過去に神との出会いをしていなければ、私たちは自分自身のとてつもない罪深さに今も気づいていないでしょう。

神が私たちをお救いになる前に、私たち自身の罪のおそろしさを私たちに知らしめる必要があります。

イザヤが神の預言者として召されたとき、まず神がイザヤにご自身を現されました。するとイザヤは、聖なる神の御前に出て、自分自身の罪深さに気づかされたのです。

イザヤ書6：1-5

6:1 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、6:2 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛ん

でおり、6:3 互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満つ。」6:4 その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。6:5 そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。」

クリスチャン信徒である私たちは、以前どのような状態だったかを忘れてはいけません。

コロサイ1：13-14

1:13 神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。1:14 この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。

そうです。私たちはかつて、暗闇の力に支配されていたのです。

しかし、今はそうではありません。私たちは今、「聖徒」です。(コロサイ1：2) 神の恵みが働いてくださったことを覚え、自分の過去を振り返るのはよいことです。今クリスチャンであるなら、私たちには神の恵みが働いてくださった過去が必ずあります。

b) イスラエルの歴史における神のペース (3-4節)

私たちの社会では、すべてにおいてスピードが重視されます。西洋文化では、待つことに慣れていません。日本でも、忙しい日常の中で何でも迅速さを求めます。

先週、10分で髪の毛を切ってもらえる場所があると知りました。鶴橋駅に、新しい理髪店がオープンしました。そこでは、店に入ってチケットを買うと、10分後にはカットを終えて出て来られるのです。

しかし、神はご自身の時に合わせてお働きになります。私たちの時間の感覚に左右されることはありません。

3-4節で、神の契約の歴史から学べることがあります。3節には、神がアブラハムの子孫を増し、イサクを与えたとあります。

増したと言っても、大きな増加ではありません。ひとりの子が与えられるのに25年もかかりました。アブラハムの人生設計に対する即答ではありませんでした。実際、アブラハムは子を与えるという神の約束が実現するのを待ち切れず、自分でどうにかしようと、妻の召使ハガルとの間に息子を作りました。(創世記16章)

4節には、神がアブラハムの家系をさらに増やし、ヤコブとエサウができたとあります。

アブラハムにふたりの孫ができました。けれどもそれは、イサクとレベカに子供ができなかった時期が20年も続いた後のことです。(創世記25：19-26)

適用

ここでとても大切なことをお伝えしたいと思います。皆さんも、神が何かをしてくださるのを待っているかもしれません。祈りの答えを何年も待っている人もいるでしょう。そんな皆さんに良い知らせがあります。神はあなたのことを忘れてはおられません。私たちとは違う時間の感覚で働いておられるだけです。

私たちは神の栄光のために生きています。私たちの栄光のために神がおられるのではありません。

私たちの人生に神が独自の時間割をお持ちであることをなかなか納得はできませんが、自分が立てた計画より、神のご計画を信頼しましょう。

例

神が24年も経ってから私たちを日本に再び来させられたのは、神が遅れたからではありません。今が神の完全なタイミングだったのです。神は24年という年月をかけて、私たちを再来日に備えてくださいました。今はそれがわかりますが、24年前はそのことがわかりませんでした。

自分の計画が神のタイミングと合わないときに神を信頼しつづけるには、成熟した信仰が必要です。

c) 神の方法は、神の民にとって謎である。(4節)

4節には、「エサウにはセイルの山地を与えて、それを所有させた。ヤコブと彼の子らはエジプトに下った。」とあります。

なぜそのことがここに記されているのでしょうか。

不思議です。それよりも不思議なことは、契約の家系ではないエサウとその一家が土地を受け継いだのに、契約の家系であるヤコブが土地を受け継がなかったのはなぜかということです。ヤコブと家族はエジプトに行き、後にその地で奴隷になります。

(創世記15 : 13-16)

なぜ契約の家系でない人々が報いを得る一方で、契約の家系がつらい奴隷生活を強いられたのでしょうか。

神に選ばれた人々が不幸な目に遭い、他の人たちが幸せな暮らしをするのはなぜでしょう。

聖書もこういった謎があることを認めています。ヨシュア記の著者は、イスラエル民族の歴史の一部としてこれを捉えています。

神の民は幾度となく、辛苦に耐えながら約束された神の祝福を待たなければなりませんでした。

ヨシュアも、イスラエルのつらい歴史を美化しようとはしませんでした。

適用

神の民である現代のクリスチャンに置き換えるなら、「天国への道のりは平坦ではない」ということだと思います。

テモテ第二3 : 12は語ります。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」

パウロはピリピ3 : 10で、キリストの苦しみにあずかることを知りたいと言いました。

ジョン・バニヤンも天国への旅路には多くの困難があることを知り、著作「天路歷程」でその困難を描きました。

バニヤンは、イエスを信じる信仰のために投獄され、その収監中にこの本を書きました。

彼はつらい目に遭いましたが、いきいきと描かれた彼の著作は、世界中で多くの人々を祝福しました。

この本を読んだことがある人は多いでしょう。あるとき、主人公の巡礼者はでこぼこ道に差し掛かります。それでなかなか前に進めません。

すると、そこに「迂回の草原」と書かれた標識が目に入りました。

その先には、青草に花が咲く素敵な草原が広がっていました。巡礼者は、でこぼこ道を離れてその美しい場所を見にいってみようという衝動にかられます。けれども、天に続く道はこのでこぼこ道だと示され、つらい道をなんとか乗り越えようと決心します。

このことについて、マタイ7：13-14でイエスがはっきりと語っておられます。

7:13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。 **7:14** いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

また、私たちの宝はこの世にはなく、後に来るとも語られました。

マタイ6：19-21

6:19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。 **6:20** 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。 **6:21** あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

地上に樂園を探しても、見つけることはできません。しかし、天国に樂園を求めるなら、いつか必ずそこにたどり着けるでしょう。

ただし、天国へたどり着くには、十字架の道を通らなければなりません。

イエスを信じ、イエスに従うことによってのみ、私たちは天国に行けます。

神は正直なお方です。みことばで、天国への道は平たんではないと語られます。

神が正直なお方だから、私たちはこのお方を信頼することができます。でこぼこ道を進まなければならないときでも、信頼できるのです。

神はいつでも困難を取り除いてくださるわけではありませんが、困難な状況におかれた私たちを常に支えてくださいます。

d) イスラエルの歴史が神の御力を顕著に示す。(5-13節)

5-12節で、ヨシュアはいくつかのできごとを振り返り、神の御力が民を守り救うために示されたことを強調しました。

神はモーセとアロンを遣わして、当時の世界で絶大な力を持った国家から200万人を超える神の民を救い出されました。神は奇跡を起こされ、エジプトに災いを送られました。5つめの災いで、神は、ご自身の民を裁きから守られました。

出エジプト9：4

しかし【主】は、イスラエルの家畜とエジプトの家畜とを区別する。それでイスラエル人の家畜は一頭も死なない。

神はエジプトからイスラエルの民を連れ出し、葦の海を分けてくださいました。こうして、200万人を超えるイスラエルの民は、葦の海の乾いた地を歩いて渡りました。

神は荒野でも、民に必要なをお与えになりました。食料品や衣料品を買う店はどこにもありません。神はマナを天から降らせて食事を与え、民の履物を擦り減らないようになさいました。

ヨシュアは、神ご自身が戦ってエモリ人やモアブの王を倒してくださったと語ります。

そして、カナンの地での勝利について語ります。

13節で、イスラエルの民が住むようになった地で神が与えてくださったものを改めて挙げています。自分たちの建てなかった町や自分で植えなかったぶどう畑の実などです。

適用

もし人生の終わりに、これまでの人生で起こった奇跡について神と面と向かって話すことができたなら、神が私たちの面倒を見るために起こされた奇跡の数々を示してくださいでしょう。その多くに、私たちは気づいていません。

最大の奇跡は、イエスが私たちを愛してくださることです。天の栄光を離れ、罪に冒されたこの世に来てくださったことです。自ら進んで私たちの身代わりのいけにえとなり、無惨な死を受け入れてくださったことです。

何よりすばらしい奇跡は、神の恵みが無償で誰にでも与えられることです。

この神の愛をあなたはもう受け取りましたか。

2. ヨシュアが契約を守るように命じる。(14-24節)

ここには、ヨシュアからの言葉が4度、民の応答が4度記されています。

14-15節でヨシュアが最初に命じます。

24:14 あなたたちはだから、主を畏れ、真心を込め真実をもって彼に仕え、あなたたちの先祖が川の向こう側やエジプトで仕えていた神々を除き去って、主に仕えなさい。 24:15 もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にいたあなたたちの先祖が仕えていた神々でも、あるいは今、あなたたちが住んでいる土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」

その答えが16-18節です。

24:16 すると、民は答えて言った。「私たちが【主】を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にそんなことはありません。 24:17 私たちの神、【主】は、私たちと私たちの先祖たちを、エジプトの地、奴隷の家から導き上げられた方、私たちの目の前で、あの数々の大きなしを行ひ、私たちの行くすべての道で、私たちの通ったすべての民の中で、私たちを守られた方だからです。 24:18 【主】はまた、すべての民、この地に住んでいたエモリ

人をも、私たちの前から追い払われました。私たちもまた、【主】に仕えます。主が私たちの神だからです。」

この命令と応答が24節まで続きます。

ヨシュアが呼びかけた内容をここにまとめてみましょう。

a) 論理的な献身 (14-15節)

聖書で「だから」という単語が登場したら、どうだからだろう、と考えなければなりません。

つまり、なぜ、だからという言葉があるのかを考えるのです。

答えは、その前の部分に記された内容を指します。

アブラハムの時代から神があなたがたのために働いてくださった歴史を思えば、これからの未来、助けてはくれない他の神々に従わず、これまで助けてくださった神、これからも助けてくださる神に従うのが理にかなっている、とヨシュアは言っているのです。

これは、パウロがローマ12：1-2で語るのと同じ論理です。

12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきま知るために、心の一新によって自分を変えなさい。パウロはそれまでの11章をかけて、神の恵みというすばらしい福音について語りました。

そして、これに対する理にかなった応答は、人生を神に明け渡し、この世のものから一線を引き、心を一新することです。

b) 唯一の献身 (15節、23節)

ヨシュアはここで、おかしいことをします。皆さんは気づいていても、その意味がわからなかったかもしれません。15節と23節をご覧ください。

24章には、「仕える」と訳されたヘブル語の単語があります。

ヨシュアは、異教の神のふたつにひとつを選びなさいとイスラエルの民に言います。

14節で、ヨシュアは唯一まことの神に仕えるようにとイスラエルの民に命じましたが、もし唯一まことの神に仕えないのなら、15節で、他の神を選びなさいと語ります。

もし唯一まことの神に従わないのなら、先祖が拝んだメソポタミアの神か、今住んでいる地のエモリ人の神かを選ばなければならないというのです。

なぜヨシュアはこのようなことをしたのでしょうか。

実は簡単なことです。イスラエルの歴史に関わられた唯一まことの神に仕えないなら、他にふたつの選択肢しかありません。ヨシュアは、その現実をわからせるためにショック療法を使ったわけです。

ヨシュアの言いたかったのはこういうことです。いずれにせよ、何らかの神に仕えることになります。だから、アブラハムの時代から先祖とあなたの面倒を見てくださった唯一まことの神を選びなさい。

適用

どんな社会でも、聖書の神に仕えないなら、神と呼ばなくても何らかの形で他の神を選ぶこととなります。

西洋文化では、車、家、ペット、または子どもなどが崇める対象です。

聖書の神に従う選択をしないなら、他の何かで心を満たそうとします。けれども、私たちの心のニーズを満たすことができるのは、聖書が教える唯一まことの神だけです。

神は、ご自身と関わらせるために私たちをお造りになりました。イエスをとおしてのみ、この関係が回復できます。聖書が教える唯一まことの神だけが、イエスをとおして私たちに本当の人生の目的や喜び、平安、そして充実感を与えることができます。

神は今、他のあらゆる神々の中からひとつを選びなさいとあなたに語っておられるのではないのでしょうか。イエスを信じ、聖書の神を選ぶのが、最善の選択です。がっかりさせられることはありません。

c) 注意深い献身 (16-21節)

ヨシュアはこの個所で、神にささげて仕えるよう民に呼びかけています。

19節をご覧ください。

24:19 すると、ヨシュアは民に言った。「あなたがたは【主】に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神である。あなたがたのそむきも、罪も赦さないからである。

ヨシュアは民に、口先で正しい答えを言うだけでなく、心から真摯に答えなければならないと語ります。物事がうまくいっているときには簡単に返事できますが、たいへんなことが起こった時も、その献身を貫けるでしょうか。

イエスは、地上で歩まれたときに同様のことをおっしゃいました。

ルカ14：25-33

14:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていましたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。

14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。14:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。

14:29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、

14:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた』と言うでしょう。

14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。14:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。14:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

イエスはヨシュアと同じことをなさっています。イエスについていくことには犠牲が伴うとはっきりおっしゃいます。他の人や他の神々、それがどんなかたちであろうと何よりイエスを第一にするのは犠牲が伴うことです。

3. ヨシュアが民と契約を結ぶ。(25-28節)

この個所には、ヨシユアが民と契約を結んだとあります。ヘブル語の単語は契約を「裂く」です。なぜでしょう。

当時の契約は、目に見える形で交わされました。動物がふたつに裂かれ、契約者の双方が裂かれた動物の間を歩きます。それは、どちらかが契約を破ったら、違反した人が契約相手によって半分に裂かれることを意味します。

この個所には、ヨシユアがイスラエルの長老たちと裂かれた動物の間を歩いたかどうかは記されていませんが、そうした可能性はあります。

契約で大切なのは、守ることを前提とした真剣な同意事項であり、双方に守る義務があるということです。

適用

ヘブル13：20と12：24は、神と人との間に今日も契約の効力があると明言します。この契約は、イエスの血によって保証された永遠の契約であり、この契約を守る義務が神にあります。

つまり、イエス・キリストに信仰をおいて、私たちのたましいを永遠に救う神の救いのご計画を信じるなら、神と私たちの契約も有効となります。

ただし、心から真剣にイエスについていく決心が必要です。神は私たちの心の内をご存じだからです。